特集：ジェンダーと地理学

ハワイにおける日本人女性の社会的ネットワーク形成

影山　穂波

Ⅰ　ハワイにおける日系人と日本人

元年者と呼ばれる日本人が , 初めてプランテーション労働者としてハワイに移住をしたのは 1868 年であった．それから 140 年を経て，現在では日系人も五世や六世の世代に入っている．2000 年のセンサスによると，ハワイの人口 121.1 万人のうち，日本で生まれた日本人と，日本人を始祖に持つ日系人（混血を含む）を合わせると，全体の 24.5％（29.6 万人）を占めている．

本稿では，戦後日本からハワイに移住した人々に注目し，これらの人々がホノルルで展開する多様な社会的ネットワークを調査した結果を報告する．活動の特徴，参加者の動向，家族との関係から，現在ハワイに居住する日本人が主体となった社会的ネットワークが，ハワイにおける日本人の空間形成にいかなる影響を及ぼしているのかを検討したい．

1．ハワイにおける「人種」構成と日系人の位置づけ

ハワイでは，先住民であるハワイアンと，白人（アメリカ本土出身者やポルトガル出身者）のほか，19 世紀以降，プランテーション労働者として入植してきた移民の子孫として，中国系，日系，フィリピン系，韓国系などの住民がいる．ハワイにおける人種民族の多様化は現在も進行中である．その中でも日系人は，白人に次いで人口規模が大きい．

第二次世界大戦前の人種関係についてみると，白人が政治，経済，社会において高い地位を占め，そのほかは，入植が遅いほど低い地位におかれていた．そこには，人種を基盤とする差別的な構造が形成されていたといえる．ポルトガル人は，アメリカ本土から来た白人とは異なる位置に置かれていたものの，白人として，ルナ，すなわちプランテーションにおける労働者の管理人の役割を果たしていた．労働者として入植した中国人は，後に入植する日本人やフィリピン人よりも高賃金を得るようになった．契約を終えると商売を始めた者も多かった．

日本人は 1885 年に始まる官約移民を通じて本格的に入植を開始した．プランテーション労働者の他に，宗教家もハワイへ移住した．プランテーションでの契約終了後，旅館業など商売に転じる者も登場している．ハワイにおける旅館業は，宿泊の機能のみならず，顧客の旅券，戸籍謄本，出生証明書などを保管し，日本の役場に届ける手続きも取り仕切っていた．こうした旅館の多くは上陸した日本人にとって便利な地域，すなわち港に近いチャイナタウンの一画あるいは，その近辺に建てられた．出身地ごとに利用する旅館が分かれていたが，これは役所的役割を担う旅館が，同郷の人々にサービスを提供していたからであり，旅館を基盤として同郷のコミュニティが存在していた．現在，こうした役割の一端は県人会が担っている．同郷集団で現在なお強固なネットワークを見せるのは沖縄出身者である．日本人からの差別を経験した彼／彼女らは，自らをオキナワンと名乗り，自分たちのネットワークを築いてきた．

さて，戦前からハワイに移住してきた日本人，沖縄県出身者は日系一世として，ハワイにおける日本人の第１集団ととらえることができる．そして戦後ハワイで生活を営むようになった日本人は，移住の時期と移住理由により，第２～５の４集団に分けられる．第２集団は，戦後に国際結婚をして移住してきた女性，第３集団は日本企業の進出により増加した駐在員家族，第４集団はハワイで起業をした人々，第５集団は近年の定年後の移住者，あるいは日本とハワイを往復している人々などである．本研究で対象とするのは，戦後移住してきた第２から第４の集団である．この集団に注目するにあたり，重要な側面の一つが，ハワイ経済における日本の投資と企業進出である．日本企業の進出は，1953 年日本航空ホノルル支店の開設に始まった．1954 年に住友銀行がセントラル・パシフィック・バンクの設立を援助し，1959 年に東急がアラモアナに白木屋を出店している．1970 年代に日本の企業進出が活発になっていったが，本格的な動きは日本のバブル期に合わせて 1980 年代後半から 1991 年にかけてということができよう．おもな投資先はホテル，コンドミニアムの建設，ゴルフ場，リゾート開発，ショッピングセンターであった．しかし日本でのバブル経済が崩壊すると，投資が激減するのみならず，日本企業はハワイから撤退し，不動産を売却するようになった．2000 年前後からは大規模企業によるハワイ進出から，個人による進出が中心となり，小売店，レストランの経営の動きが顕著になった．在領事館 HP によると 2009 年 8 月現在，在留邦人は 23,128 人で，そのうち長期滞在者は 9,654 人，永住者は 13,474 人となっている．また 2008 年現在，日系企業は約 145 社を数えている．日本企業の投資の推移は，日本人駐在員の動向の推移でもある．

２．ハワイの日系人に関する研究

ハワイにおける日系人に関しては，多様な側面から研究が進められている．日系人の歴史については，王堂・篠遠（1985）に概略が述べられてる．1885 年の官約移民の最初のハワイ到着から 100 年を記念して出版された本書は，ビショップミュージアム所蔵の資料を中心に，250 点ほどの写真をもとに歴史がつづられる．他に，官約移民 100 周年を記念して出版された Kotani（1985）では，移民の歴史，プランテーション労働者の賃金交渉のためのストライキの動向，真珠湾攻撃以降の日本人に対する動向，二世の出征などが説明される．タカキ（1985）は日系人のプランテーション労働と生活に注目しながらハワイの多文化社会を提示した．また中嶋（1993）はハワイ人の立場からハワイの歴史を検討し，その中での日本との関係，日本人・日系人の動向について説明する．

地理学分野においては久武（1998）が 1920 年代前後のマウイ島を事例に，サトウキビプランテーションの生産構造の転換期においての労働者のエスニック構成と，ホノルルの人口におけるエスニック構成を検討している（久武　1999）．飯田（1998）はマウイ島における日本人の職業と居住地に関して検討し，さらにハワイに居住する日系人の居住地と職業を分析している（飯田　2003）．また，Ogawa（1973）は，日常生活の分析から，日系人のアイデンティティが多様な民族との交流の中で変遷していることを指摘する．Okamura（2001，2008）は日系人のライフストーリーに注目し，その生活を描いている．サイキ（1995）は，ハワイにわたったさまざまな女性たちの行動，言葉に注目し，女性からみた日系人の歴史を描いている．また Yano（2006）は戦後の日系人のミスコンテストを事例に，エスニシティ，ジェンダー，階級の見地からハワイ日系人女性が自らの位置を築いていることを提示している．

近年，日系人に関する研究はさらに多様な視点から行われるようになった．城田（2004a）は北米，ハワイ，日本の博物館において日系人・沖縄系移民の歴史がいかなる展示をしているのかを

検討した．また城田（2004b）はオキナワンの踊りや歌にも注目し，彼らのアイデンティティとハワイにおけるエスニシティの様態を提示する．後藤・松原・塩谷（2004）は，ハワイにおける日本映画について（鈴木 2004），食とレストランについて（浅井　2004）など，地域調査を継続して行っているものを中心に集めた論文集だが，人々の日常生活から地域を描くことを目指している．

第２の集団に関しては，アメリカ本土の事例であるが安富・スタウト（2005）が戦争花嫁の事例を，第３の集団に関しては Kurotani（2005）がアメリカの駐在員の妻に焦点をあてて，グローバリゼーションをとりまく文化的アイデンティティ，グローバリゼーションの中での家庭の役割，モビリティの特徴を検討しようと試みている．また影山（forthcoming）は，日本語新聞『イースト・ウェスト・ジャーナル』（1976 年創刊）[1] に登場する女性たちの言説からハワイにおける日本人女性の生活を紹介した．ハワイで出版される日本語情報誌は増加し，ハワイ在住の日本人の動向が紹介されることはあるものの，研究対象としての蓄積は見られない．

日本にアイデンティティを持つ集団は，多様な活動を通じて社会空間を形成してきた．活動を検討するにあたり，フリーペーパーは有益な情報源となる．そのひとつで，ハワイで生活を送る上での多様な情報が掲載されている『ハワイべんり帳 2009』には日本人・日系人にかかわる各種団体のリストがある．それによると，連協・日商工として「ハワイ日系人連合協会」「ホノルル日本人商工会議所」「ハワイ日米協会」「ホノルル日本人青年会議所」「ハワイ日本文化センター（JCCH）」がまず挙げられる．さらに「日本クラブ」「日系婦人会財団」「ハワイシニアライフ協会」「主婦ソサエティ・オブ・ハワイ」などが続く．美術，文化や趣味としては，具体的には生け花・茶の湯，日舞・邦楽，詩吟・民謡・謡曲，琉球芸能，武道が並んでいる．ほかに，宗教法人と県人会が各種団体として取り上げられている．日本人と日系人の境界は見えにくいが，日本語を主要言語とした多くのネットワークの主体となっているのは日本人，とくに新一世と呼ばれている戦後日本から移住した人々による活動となっている．日系の世代が進んでいる現在 , 言葉の壁により，活動の内容は分かれる傾向にある．

本稿で研究対象とする社会的ネットワークおよび活動の参加者の中心は，女性たちである．ハワイで生活を営む日本人にとって，活動への参加は自分たち日常生活にいかに関係しているのかを考える一つの契機となっている．彼女たちの位置と行動から，多様な活動を通じて生産される空間とジェンダーとの関係を検討してみたい．

Ⅱ　新一世の日本人女性

新一世とは，第二次世界大戦後にハワイに移住してきた日本人を指す. 新一世の日本人女性は，ハワイに移住した時期や婚姻状態によって多様な背景を持つ．ローカルの男性と結婚した女性，夫の駐在のためにハワイで生活する女性，一時滞在を契機にその後もハワイでの生活を選択している女性，自分の意思で仕事を求めて来た女性，定年後移住あるいはハワイと日本を往復している女性などである．

彼女たちのハワイでの位置を表す指標の一つがビザである．これは女性たちがハワイにおいてどのような活動をすることができるかを決定づける．非移民ビザの中心となるものには B ビザ（商用・観光），E ビザ（駐在員），F ビザ（留学生），H ビザ（一時労務者），J ビザ（留学生・研究員），L ビザ（派遣社員），M ビザ（職業教育学生）が挙げられる．それぞれ滞在期間や就労条件が異なるが，夫の職業等を理由にビザを取得すると，妻は家族ビザとなり，就労のための申請を受理されないと賃金労働に就くことはできない．就労できないことで，女性たちの行動範囲は限定されるこ

ととなる．一方，移民ビザであるグリーンカード取得者や市民権を持つ人たちも多い．ビザステータスとネットワークの形成の関係に注目することで社会空間の一側面も見ることができよう．またその際に，日本で育った女性たちが持つジェンダー意識が，ハワイに移住して，あるいは活動に参加して，変化しているのかどうかにも配慮する．

多様な条件で入国した人々，とくに女性たちは，いかなる人間関係を形成しているのであろうか．またいかなるアイデンティティを築いているのか，その価値観はローカルな場所に規定されているのか，具体的な社会的ネットワーク活動の事例から検討していく．

調査期間は 2009 年 5 月から 9 月である．ホノルルで展開されている活動グループの一員として参加し，それぞれの団体の展開を聞くとともに，構成員の生活と活動とのかかわりに関して調査を実施した．

Ⅲ　ホノルルで展開されるネットワーク

本研究では，ホノルルで展開されている活動を取り上げる．本章では，実際に参加させてもらうことのできた 6 つの活動について，その概要と，参加者にとっての活動の意味を検討する．さらに，それが家庭との関係においてどのような存在であるのか，分析する．

（1）主婦ソサエティ・オブ・ハワイ

主婦ソサエティ・オブ・ハワイ（Shufu Society of Hawaii）は，「主婦の友ハワイ友の会」という名称で，1966 年，主婦の友社財団法人石川文化事業財団海外事業部の一環として発足した．ハワイの人々に日本文化を紹介し，その交流を通じて相互理解を深めることを目的としている．結成当初は，ハワイ書籍組合，ハワイタイムズ，ラジオコホなどの協賛を得ていた．具体的には，料理教室，手芸教室，後援会，演奏会などを企画・開催している．

1986 年に非営利団体としてハワイ州政府に登録，2000 年には，財団法人石川文化事業財団の閉鎖に伴い名称を「主婦ソサエティ・オブ・ハワイ」と変更している．

年会費は 20 ドルで，それに加えて会の開催ごとに参加料を払う．メンバーは 110 名ほどで，常時参加するのは半数程度，平均年齢は 70 歳代である．約 30 人の役員のうち，20 人程度が参加しての役員会が月一度開かれ，会の方針や今後の運営が検討されている．全体の会合としては，総会のほか，領事館での食事会や，クリスマス会，有識者を招いての講演会などが催されている．新規参加者の勧誘は『日刊サン』，『Hawaii times』などのメディアをはじめ，メンバーによる勧誘，口コミなどを通じて行われている．実際に入会の際には会員の紹介を必要とする．さらに役員会で承認を受けて正式の入会となる．知り合いの会員がいない場合，履歴書の提出を求めている．実際に入会できなかった人もいたそうだ．「ハワイは狭いから問題のある人が来るとすぐに分かるの」と役員の一人が語ったように，役員会は秩序を乱す人を拒否できるシステムとしても機能している．

領事館とのつながりは，2001 年に起こったえひめ丸事件[2)]をきっかけに深まったそうだ．事件が起こった際，日本から駆けつけてきた家族に大量の食糧を用意し，支援をした．領事館と家族とをつなぎ，人々の心を慰めたということで，領事館の感謝が会との絆を生んだ．

参加者にとっての活動の意味を尋ねると，役員の一人である F さんは，この活動を一つのスティタスと答えた．市議を招くことができるグループとなったことを誇りに思っているというのである．彼女はリタイアしたのち本格的に活動に参加するようになり，交際する人たちやライフスタイルが変わり，「入ってよかった」と語った．1950 年にハワイに来たという T さんは「何かして喜んでもらえることが喜び」であり「今でも勉強さ

せてもらっています」と話してくれた．副代表のKさんは「外との交流」があり，それを通して世界が広がったという．Aさんは日本人として生きることのできる場所であり，様々な問題に対して，より良い方法を探す場所であると語った．また公的なサービスと同様の役割を果たす可能性も語ってくれた．Pさんは「自由のある国でリタイアし，いろいろなことをやってみて，今貢献していることが愉しみ」になっているという．

入会規定があり，年齢層があがっているという課題を抱えているものの，日本人女性のみならず，男性も日系人も活動に参加し，新しい試みにもチャレンジしようとしている活動の一つである．

（2）虹の集い

虹の集い（Rainbow meeting）はプロテスタント教会であるマキキ教会の活動の一つである．1904年に創立されたマキキ教会は，高知出身の初代牧師であった奥村多喜衛が創設した．日本人の心のよりどころとなる場所を築きたいと考えた奥村は，高知城を模してマキキ教会を建設した．創立100年を数えた現在なお，多くの信者を抱えている．その理由の一つとして，日本語部と英語部に分け，言語の問題のために参加できないことがないよう，配慮してきたことが挙げられる．

女性たちを中心とした虹の集いの活動は，現在の黒田牧師が着任した1983年以来続いている．牧師夫婦が就任した当時，日本からハワイへの投資はすでに始まっており，ホノルルには日本人駐在員が多く居住していた．その人たちを主な対象として，地域の人々に必要な活動として考えられたのが虹の集いと保育活動であった．駐在員の妻たちが，ハワイでの生活を快適に過ごすことができる場所の提供が当初の目的であった．ハワイの食材をいかに調理するのか，ハワイの習慣はどのようなものか，講師をたてて話を聞くとともに，参加者同士が情報交換をすることのできるようにはからったのであった．なかには，外国生活に精神的なダメージを受けた人もいたそうで，そのよりどころのひとつにもなっていたのである．幼い子供を持つ母親のための保育活動も同時期に始められている．

現在は，ハワイから多くの日本企業が撤退していることもあり，メンバーの中心はハワイ居住者であり，特に永住権，市民権を持っている人が多い．一方で，ハワイと日本を往復しているリピーターも多い．月に2回，第1・第3火曜日に10時から2時間ほど会が開催されている．参加者は20名程度である．女性が大半を占めるが，男性の参加もみられる．ハワイのリピーターの方もお互いに既知の存在のようで，親しく話を交わしていた．

虹の集いには，基本的に信者でなくても参加することができる．むしろ多くの人の参加を歓迎する場となっている．しかし現在，参加者の多くが教会のメンバーであり，「神」との関係において，会を位置付けている人も少なくない．家族ぐるみで教会活動に参加している人が多く，彼女たちが活動に参加することに対して家族が反対することはないようだ．

メンバーの居住地域は，必ずしも教会近郊とは限らない．マキキ，ワイキキのみならず，ハワイカイ，リリハ，ワイパフと広範囲から来ている．基本的には車での移動が中心だが，バスを乗り継いで来ている人もいた．

この会を，世代を超えた人たちと交流が出来る楽しい場所と位置付けている人は多い．会では皆で昼食をとるため，ここで日本食を食べられることを楽しみに参加しているという人もいた．日本人の友人を作ることができ，お互いに助け合える場として形成されてきている．参加者の中には，より広く参加者を募りたいが，それが出来ていないことを問題点として挙げている人もいた．

虹の集いの活動は，料理教室や講演を通して，日本との接点を見出し，参加者がハワイで生きる

ことを考える場所の一つとなっているのである．

（3）カトレア会

カトレア会（Cattleya meeting）は在ホノルル総領事夫人を名誉会長に迎え，駐在員の妻たちが中心となって 1985 年に始められた会である．会の命名は当時の在ホノルル総領事である．その前身はさくら会といった．発足当時は社交的な役割を果たしており，お茶会やゴルフコンペ，ボランティア活動などが行われていた．カトレア会に所属していることは，一つの誇りであったという人もいる．ハワイ経済が好調であった時期には 40 人近くのメンバーがおり，入会制限があったという．

現在のカトレア会は，ボランティア活動を中心としている．メンバーは 16 名で，入会制限などは設けず，誰でも参加できる．具体的には，週に 1 回，日本人慈善病院として発足した現在のクアキニ病院[3)]のケア付き老人ホームの役割を担っている高齢者施設を訪れている．第 1 ・第 3 金曜日に重度の介護を必要とする施設を，第 2 ・第 4 金曜日に軽度の介護を必要とする施設を訪問している．施設では，9 時半から 10 時半まで，入居者と歌を歌ったり体操をしたり話をしたりする．

会長は，名簿順で選出される．総会は年に 1 回行われている．現会長は，昨年まで年に 2 回だった総会の回数を減らし，第 1 ・第 3 木曜に行われていた重度の高い施設への訪問を金曜日に移動した．曜日が木曜・金曜にまたがることで，木曜参加の人が極端に減っていたため，金曜日に統一することにした．これにより，以前より安定した参加が見られるようになった．ボランティアを行うに当たっては，血液検査を必要としている．参加者は自分たちが気持よく活動ができる環境をクアキニ病院側とともに作り上げていると感じているそうだ．

クアキニ病院がハワイにおける日系人の歴史を語る上で重要な存在であることもあり，カトレア会の活動は，新一世とハワイにおける日系社会をつなぐ役割の一つともなっている．カトレア会に参加するようになって，友人が増えると，自分の行動範囲が広がり，毎日の生活に張りができたと会員の一人は語る．また，日本語を生かしてボランティア活動ができることが本当にうれしかったという．

カトレア会の活動は，社交的活動からボランティアを中心としたものに形態を変えながら活動を展開している．駐在員の減少にともない，地域に目を向けた社会的活動の必要性が増し，それに応じたネットワークを形成しているのである．

（4）日本文化センターギャラリードーセント

日本文化センター（Japanese Cultural Center of Hawaii）は 1994 年に設立された．センターの中心の一つがギャラリーである．ボランティア活動としては，リソースセンターの資料の管理と整理，イベントに向けての企画・運営などがあるが，ここでギャラリードーセント（Gallery docent）に注目したい．

「おかげさまで」と名付けられたこのギャラリーには，ハワイのローカルの日系人，日本からの観光客をはじめ，様々な人が訪れる．展示は 5 セクションに分かれており，それぞれ移住してきた人が日本から実際に持ってきた生活品や，当時の家具などがおかれている．このギャラリーには，英語と日本語とでガイドをするドーセントがいる．日本語のドーセントグループは，月に 1 度，第 3 木曜日に勉強会を行っている．2009 年 9 月現在，日本語のボランティアは日系二世 1 名と日本人 15 名である．日系二世の S さんが日本語ドーセントの指導的役割を果たすことが特徴の一つでもある．S さんを含め，設立からのメンバーが 2 人，10 年近く参加している人もいるが，あとは 2 年以内の人が大半を占めている．日系人に関するギャラリーの案内をする必要があるため，年に 1 回の研修を含め，ガイドの手助けをするシャドウを重ねた上で，ガイドに至る．持ち回りで発

表する，月に1回の勉強会では，太平洋戦争中の日系人について，一世の女性の状況について，ハワイ王朝の歴史など多岐にわたったテーマが取り上げられていた．

参加者の居住地はホノルルからパールハーバー，ハワイカイまで広範囲にわたるが，ギャラリーまで車で30分くらいの地域と考えていい．自転車で参加している人もいるが，車での移動が大半を占める．

この活動は，日系人の歴史というはっきりとしたテーマがあるため，日系人についてより深く知りたいという知的好奇心から活動に参加する人は多い．新しいことを始めたいと思った際に，自分の勉強になり，さらに日本語を生かすことのできる活動として参加を決めた人もいた．

一方で，課題も残っている．日本文化センターの施設は，基本的に日系人の歴史を扱うものであり，日本語を話せないスタッフが大半を占めている．連絡の不徹底や誤解など，時に意思疎通がうまくいかず，日本語と英語を話す人の間に溝が生じてしまうこともあるそうだ．また英語ドーセント活動は，ギャラリーの展示案内にとどまらず，現地の小学校などに出向いて日系人の話をしたりするため，教育という側面が強い．日本語ドーセントとは役割が異なっているのである．それにもかかわらず英語ドーセントと同様の活動を求められ，困惑したこともあったという．

勉強会はできていても研修が十分ではなく，ガイドとしての自信が持てないという指摘もあった．最近ではギャラリードーセントの存在を知らないのか，ドーセントの要望も少なくなっており，活躍する機会が減った．同組織の活動を一般の人にいかに知ってもらうか，旅行者にも来てもらえる場所にするかという話し合いもなされている．日本から来る観光客は，ハワイにおける日系人の歴史をもっと知るべきだと指摘した人もいた．

課題は多いが，参加者は活動を通して社会参加できているという感覚を持ち，仲間を作って勉強をすることのできる場所を形成している．この活動は，日系人の歴史を知るという意味で，ハワイにおける日本人・日系人の生きた場所を意識し，ハワイと日本との関係を確認する役割を果たしている．

（5）淑女の会（お茶会）

「淑女の会（通称：お茶会）」（Lady's Group）は，ホノルルに在住する「新日系一世」の女性有志が，職業人として，主婦として，母として個々人が抱える問題は同じだと認識し，解決の手段，情報を自由に交換し合い，お互いを励まし合える集う場として2005年に発足した．入会に際しては，創立メンバーの承認が必要で，人づてにメンバーが集まっている．会費はなく，年に4回ほど会を催して，情報交換を行っている．2009年7月時点で，会員は22人である．基本的に会員の自宅かレストランで会は催されている．形式張った「ミーティング」ではなく，気軽に集まれて自由に意見や情報の交換が出来る会合として発足している．

7月の会に参加したところ，12名の参加予定が半数の6名しか来ていなかった．会員の多くが仕事に就いており，当日来られなくなることもしばしばあるという．会合では自分たちの今の状況や問題点などが提起され，ざっくばらんに話が進んでいた．自己紹介から始まり，お互いの多岐にわたる話を聞いているうちに時間が過ぎてしまった．海外で生活をすることの苦労と，楽しさを同時に語ってくれた参加者は，今の自分があるのは，支えてくれる人脈によるという指摘もしている．

「淑女の会」はもともと，ワシントンで設立された女性ネットワーク，ワシントン・ジャパニーズ・ウィメンズネットワークに参加していたNさんが，ハワイでも同様の活動をと考え，始めたものである．働く日本人女性たちが情報交換をし合える場所を持つことは，自分たちの生活のためにも，労働を続ける上でも重要だという信念のもとで，HP等で会員を募り，活動を展開している．

代表のＮさんの裁量で日程や場所などが決められ，皆が彼女を慕って集っている．国際結婚している人も多く，日本との生活習慣や考え方の違いも日常的に経験しているが，こうした会を通じて，相互扶助しているのである．インフォーマルな形式を取るものの，地域に根ざす人々の生活改善のための活動であり，ただの楽しみの会ではなく，自分たちの資源を共有し合うものとなっている．

（６）ガイアパシフィックセンター

ガイアパシフィックセンター（Gaia Pacific Center）は 2008 年に発足した．「地球（ガイア）はそれ自体が，ひとつの生命体であり人間もその一部として生かされている」という考えに賛同する人々が集い，活動が始められた．この活動が発足することになったきっかけは，『地球交響曲ガイアシンフォニー第三番』の上映である．活動の中心メンバーは，このドキュメリンタリー映画のハワイ上映実行委員会に参加していた．この自主上映会を実施したことで，地球環境への関心を深めた人たちを中心に，ガイアは発足したのである．

活動を展開するにあたって，環境問題をより深く，具体的に検討することがまず必要とされた．メディアでも環境問題は頻繁に取り上げられており，多様な場面で解決の必要性が訴えられているにもかかわらず，日常生活にひきつけて考える機会は多くはなかったと会員は語った．そこで自分たちの生活を見直し，問題の解決に取り組むための研究会が始められた．無関心であることと同様に，解決方法を知らないことも問題ではないか，と考えたメンバーは，身近なところから環境問題に取り組み始めた．

月に一度，第３土曜日にマキキ地域にある寮の一室で行われている勉強会では，持ち回りで担当者を決め，問題提起をしている．日本とアメリカのゴミ収集の違いと，相互の特徴を話し合ったり，行政の姿勢について，法令を取り上げて検討したり，報道番組でごみの回収後の道程を見たりしていた． この勉強会には，HP を通して誰もが参加することができるようになっている．幅広い人材を集めることが課題の一つである．理事会は月に一度，代表，副代表，事務局長，監事ほか，合計９名から構成されている．また，企画／広報／予算／資金収集の４つの委員会を設定し，それぞれに検討した事項が理事会で検討されている．

メンバーは仕事をしている女性が中心である．そのため，平日ではなく土曜日が活動日として当てられている．日常的に連絡を取り合っているが，メンバーが顔を合わせるのは，月に一度の勉強会と，その後の理事会となっている．

2009 年 10 月 22 日と 25 日には『地球交響曲第４番』の上映が決定した．日頃の勉強会に加え，上映に向けての作業が８月半ばより始まった．昨年は英語版の上映だけであったが，今回は日本語版での上映も行い，広くハワイの人々に見てもらいたいという．チケットの作成から販売まで，手作業で進められており，構成力と実行力とが必要とされる活動と言えよう．10 月に行われる上映会は，日本沖縄センター（英語上映）とハワイ大学（英語と日本語上映）で行われる．各回 300 人，合計 900 人の来場を目指しており，ガイアへの関心を深める機会にもなっている．

本作品には版画家の名嘉睦稔が登場する．沖縄県伊是名島出身の名嘉にちなみ，日本沖縄センターでの上映も実現することになった．当日は 7 つの団体の展示ブースも設けられ，環境問題を広く考える機会とするよう力を注いでいる．

環境問題を身近なテーマに置き換えて，自分たちのできることを考える姿勢が特徴となっている． ７月末には，ゴミ拾いイベントを行った．ゴミ拾いには人が集まらないため，マキキのトレイルを歩くというハイキングコースを結びつけて日曜の午前中に開催した．手袋とトング持参でゴミを拾い，その後ハイキングコースを歩くこのイベントは，自分たちの住んでいる町を体験する活動

である．居住空間を築くための活動を，居住者に認識してもらうための第一歩とみることができる．

HP には「現在叫ばれている地球という生命体の危機を克服するためには，そこに生かされている人間自身が“心”の在り方を正すこと，一人一人が自分のできることから行動を起こすこと，その“心”の在り方を自分の周囲から広めていくことが重要である」と主張されている．今後の展望は，地球本来の自己治癒力を取り戻し，環境破壊を食い止めるためのさまざまな活動や考え方を太平洋の中心であるハワイからアメリカ本土およびアジア各地，他のパシフィック諸国へ，そして全世界へと普及させることにあるという．

ガイアの代表者を務める T さんに話を聞いた．彼女は，翻訳の仕事に従事しているキャリアウーマンである．活動の参加者は子供を持つ人が多く，次世代のために今，するべき活動が環境問題への行動であるという考えを持っていた．学歴の高い人も多く，ハワイに住んでいる日本の女性は本当にまじめだという印象を持っているという．日本人は元々教育水準が高いが，働いている現在もなお，勉強したいという意識を持っている女性が多いと感じている．ハワイは，不況もあり，極端に賃金が低い．観光産業が中心で，それ以外の産業に就くことが難しいため，なぜここにいる必要があるのかという考えが彼女の中では，常にあったという．その中で始めたガイアの活動では，同じ意思を持ち，考えに賛同している人が集まることで，自分たちの活動を地道に進めて行くことができるという．

T さん自身は「マイ箸」を持ち歩き，紙コップを使わない努力を始めた．彼女のオフィスでもこれを徹底し，ゴミが減ったという．アメリカの消費社会に飲まれている感じがするので，自分たちのできる範囲で，自分たちの活動ができるように努力して行きたいという．

以上，現段階で調査を進めている 6 団体から，ハワイ在住の女性が，活動に参加している状況を紹介した．

日本人女性だけでなく，男性も日系人も参加するようになった主婦ソサエティは，平均年齢 70 歳代で会員の高齢化が進んでいるものの，公的支援に活動を生かしたいと考える会長を迎え，ボランティア精神を持って，多様な人々を結び付けようと試みている．活動を展開する中で，問題意識を持ち，行為主体として社会空間を拡大している．

虹の集いは，参加者の居住範囲が広く，多様なビザの人たちの参加が特徴である．創立当時，目的の一つであった，駐在員の妻の参加は減少し，永住権，市民権保持者が中心となっているが，世代を超えて人々がネットワークを持っている．料理や講演会では，女性を対象とした活動が多く，ジェンダー役割を意識している側面もあるが，この活動に参加することで，日本人としてのアイデンティティを再確認している事例もみられた．

カトレア会は社交的なクラブからボランティア活動へと，形を変えていった活動の一つである．現在の会長は，参加者が快適に活動できるように配慮している．日本企業のハワイからの撤退による参加者の変化など，経済的な変動が活動自体の変化にもつながっているが，その中で自分たちの求める活動を展開している．時代に応じた活動へと組みかえることで，空間を築いていく過程でもある．

日本文化センターの活動は，「日本人」というアイデンティティを改めて認識させるものである．ギャラリーの説明を通じて，日系人の歴史を理解し，日本人としてハワイ日系人との交流が図られている．

淑女の会は，人々のネットワークを通して，豊かな生活を築こうと努めている活動である．勤労女性を中心とした相互の情報交換は，50 歳代世代の女性たちにとって，有効かつ重要なものとなっている．労働条件や老後の問題など，ジェン

ダー化された社会の問題点を検討しあい，共通の課題を話し合うことで，自分たちの生活を向上させていこうという意識がみられる．

ガイアは環境問題を身近な問題に置き換えて自分たちが生活を営む空間を再検討することを目的としている．『地球交響曲』の上映を通して出来たネットワークは，映画に見られるグローバルなスケールから，近隣ネットワークのスケールへと読み替えをし，家庭のスケールまでを提示する．

ハワイと日本との経済的関係は，女性たちの活動にも大きな影響を与えている．日本人居住者の多くは，ハワイで職を持つが，女性に関してはビザの関係上仕事のできない人も多い．女性の地位がそのまま生活にも投影されている．一方で働くことではなく妻であることが一つのスティタスとして機能している側面もある．現在なお社交の役割を果たす活動では，自分たちの位置を改めて認識する場を設け，同様の位置にいる人たちとの交流を通して，多様な機会を得，さらなる活動への契機を生み出していた．

Ⅳ　おわりに

本研究で調査の対象とした社会的ネットワークの参加者たちは，彼女たちの活動を通じて，行為主体として自分たちの快適な空間を創るべく行動をしている．

ハワイに移住し，アメリカに自分たちの生活の基盤を置く一方で，日本人としてのアイデンティティを強く持つ人は多い．とくに国際結婚をしたことで，周囲が英語あるいは夫の母国語を中心とした生活環境におかれた女性たちにとって，「日本語で話すことのできる」ネットワークは，日本という故郷につながる場所としての意味を持っている．日本語を用いたネットワークを形成し，自らの居場所を作り出している．アメリカ社会に生活する日本人として，自らのアイデンティティを認識できる場所を築いていったのである．

彼女たちは，結婚により家庭という場所を形成しているが，そのスケールにおいては，日本的な価値観を持ち続けている人も少なくない．妻，母として，家族を支える存在としてハワイにおいても日本と同様にジェンダー化された女性の役割に束縛されそれを継承している例が多く見られた．ジェンダー関係の組み込まれた家庭においても，活動には自分の意思として参加している人が多かった．家事労働から解放されているわけではないが，家族の同意の有無に関わらず自分の意思で活動への参加を決定している事例もみられた．

活動に参加する多くの女性たちにとって，活動は参加者の社会空間を形成し，自らのアイデンティティとジェンダー意識を再検討する機会となっている．活動への参加は「自分自身を見つけるためのもの」であったとＭさんは語る．Ｔさんは「自分の生活の場を作り出すもの」と活動を指摘している．ローカルなスケールではこうした活動を通じて，自らの居場所を作り出し，それが社会空間を創造する段階の一つとなっているのである．

社交が目的であった活動がボランティア活動へと変容していったカトレア会のように，社会的なネットワークは時代の要請に対応してその形を変えうる．それぞれの活動は，社会の要請と密接に関連しているのである．同時に，社会に貢献し，社会を変えていく力を生み出してもいる． 社会的ネットワークを通じた多様な活動は，社会的な要請を受けて変容するものであると同時に，自らの居場所を創り出すための活動となっているともいえるのである．

謝辞

本研究を進めるにあたり，ハワイ大学での調査を支援してくださったメアリー・マクドナルド先生，調査に快く協力してくださった活動参加者の皆さんに感謝の意を表します．

注

1) ハワイに移住してきた日本人を対象としたメディアの一つで，月に２回，1 日と 15 日に発行されてきた．ハワイには古くから日本語の新聞が存在しているが，戦後日本から移動してきたハワイ在住の日本人に向けての新聞は存在していなかった．そこで，駐在員，学生，主婦など日本からの長期滞在者を対象とした本誌が発刊された．

2) えひめ丸事件は，2001 年２月 10 日，ハワイ州オアフ島沖で，愛媛県立宇和島水産高等学校の練習船「えひめ丸」が，緊急浮上したアメリカ海軍の原子力潜水艦「グリーンビル」に衝突され，沈没した事件である．乗員35名のうち，９名が死亡した．

3) クアキニ病院は，現存するアメリカ唯一の日系移民設立の病院である．1892 年に発足した日本慈善会が基金を募り 1900 年に設立した日本慈善病院を前身とする．1917 年にクアキニ地区に「日本病院」を建設，1942 年にクアキニ病院と改名したものである．

文　献

浅井　易　2004．移民のレストラン―サイミンから探る日系人の移動と出会い．後藤明 , 松原好次 , 塩谷亨編著『ハワイ研究への招待 : フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会，185-196.

飯田耕二郎　1998．マウイ島における日本人の居住地と出身地・職業構成．沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容　1920 年代のマウイ島の事例』ナカニシヤ出版，275-308.

飯田耕二郎　2003.『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版.

イースト・ウェスト・ジャーナル　1991.『新ハワイ百科』.

イースト・ウェスト・ジャーナル　2008.『ハワイべんり帳 2009 年版』.

王堂フランクリン・篠遠和子　1985.『図説ハワイ日本人史 1885 ～ 1924』ビショップミュージアム.

影山穂波　forthcoming．ハワイにおける戦後移住の女性たち―連載「がんばるハワイの新一世」から．椙山研究論集.

後藤明・松原好次・塩谷亨編著　2004.『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会.

久武哲也　1998．マウイ島における砂糖キビプランテーションとエスニック構造．沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容　1920 年代のマウイ島の事例』ナカニシヤ出版，309-382.

久武哲也　1999．ホノルル大都市圏におけるエスニック構成―プランテーションの遺産と制度的人種主義．成田孝三編『大都市圏研究（上）―多様なアプローチ』大明堂，356-484.

サイキパッツィスミエ著，伊藤美名子訳　1995.『ハワイの日系女性―最初の百年』秀英書房.

城田愛　2004a．ハワイの日系・沖縄系移民社会の歩みと動き―博物館に見る生活文化の過去，現在，未来．後藤明・松原好次・塩谷亨編著『ハワイ研究への招待―フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会，137-154.

城田　愛　2004b．オキナワンの踊りと音楽にみるハワイ社会―エスニシティの交差する舞台から．後藤明・松原好次・塩谷亨編著『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会，249-260.

鈴木　啓　2004．ハワイの日本映画．後藤明・松原好次・塩谷亨編著『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会，155-166.

タカキ，R．著，富田 虎男・白井 洋子 訳　1985.『パウ・ハナ―ハワイ移民の社会史』刀水書房.

中嶋弓子　1993.『ハワイさまよえる楽園 : 民族と国家の衝突』東京書籍.

ハワイ報知　2008.『アロハ年鑑第 14 版』.

安富茂良・スタウト = 梅津，K．2005.『アメリカに渡った戦争花嫁―日米国際結婚パイオニアの歴史』明石書房.

山中速人　1992.『イメージの「楽園」―観光ハワイの文化史』筑摩書房.

Ogawa, D. M. 1973 *Jan Ken Po*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Okamura, J. Y. 2001. *The Japanese American Historical Experience in Hawaii Dubuque*. Iowa: Kendall/Hunt.

Okamura, J. Y. 2008. *Ethnicity and Inequality in Hawai'i* Philadelphia:Temple University Press.

Kotani, R. 1985 *The Japanese in Hawaii: A century of Struggle*. Honolulu: The Hawaii Houchi.

Kurotani, S. 2005. *Home away from Home:Japanese corporate wives in the United States*. Durham:Duke Universuty Press.

Yano, C. R. 2006. *Crowning the Nice Girl:Gender, ethnicity, and culture in Hawai'i's Cherry Blossom Festival*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

在ホノルル日本国領事館（http://www.honolulu.us.emb-japan.go.jp/jp/kakushu_yoran_jp.htm　2009 年 9 月 23 日）

かげやま・ほなみ（40 回生）
椙山女学園大学国際コミュニケーション学部

The Social Networks of Japanese Women in Hawaii

KAGEYAMA Honami
(School of Cross-Cultural Studies, Sugiyama Jogakuen University)